

親父が認知症に!?

平藤清刀さんの介護体験記 #5

年齢が分からなくなっているといえば、長男である私の歳もよく分からなくなっているようでした。

ある日は「仕事はどうだ?」と、とりあえず私が社会人であることを分かっているような話し方をするかと思えば、あるときは「清刀くんは大きくなっただねえ」と、まるで幼い子供に接するような言い方をすることもありました。

そうやって日に日に症状が進んでいきましたが、このときはまだかろうじて自宅で母と一緒に暮らしていました。

ただし、母は大変だったと思います。私は実家の近くに仕事場兼用の部屋を借りて住んでいて、夕飯だけ実家へ帰ります。父の認知症が発覚し

てから、晩御飯のおかずが目に見えて手抜きになっていきました。正確にいうと「省略」でしょうか。スーパーで買ってきた惣菜をお皿に並べただけ、フライに添える千切りキャベツでさえスーパーで売っているカット野菜になっていました。それでもみそ汁だけは自分で作っていました。

父が認知症をこじらせるにつれて、意味不明な言動や予測できない行動の対応に疲れて、料理どころではなかったのでしょう。また火を使っているときに、父が危険を認識できずに手で触れてしまう恐れもあって、コンロの使用は必要最小限に抑えていたのかもしれません。

(次回に続く)